

スピタリズムの研究などで、すでに明らかにされつつあるが、いわゆる「しつけ」の問題は、親と子という面からのみ研究を進めるだけでなく、家族関係の力動的な機制を通して、その要因を分析する必要があると思う。一般的について親子関係が調和的であれば、親の側の夫婦関係もよく適応しているはずであるが、これらの問題を把握するために、親のしつけ態度類型を中心として、婦間の要求不満、子供の性格などの調査を同時に試み、相互連関の一面を実証的に考察することとした。

2. 5種の調査表から成る質問紙法で、対象者は小学校第5学年、中学校第二学年の児童・生徒、並びにその両親と担任教師に集団や留置法の形式で実施、地域は東京都3地区、埼玉県一地区を職業別という意味で選定し、小学校一6校、中学校一5校計、1965名に依頼、昭和35年6月～8月に行った。

3. 子供に対する11項目のしつけ領域において、親の態度類型別に見ると親子の間に「ずれ」が生じているがこのような問題について地域別・学校別に分析した結果を中間報告する。

26. 親のしつけ態度とその要因（第1報）

——調査の概略と親子の「ずれ」について——

東京学芸大 田村 喜代

1. 家族集団が子供の性格形成や、社会化に対して、重要な影響を及ぼすということは、親子関係の研究・ホ